

高大社接続を踏まえたキャリア教育の現状分析と改善に関する考察

畠 一樹¹⁾，矢野 里奈²⁾

- 1) 徳島大学高等教育研究センター・キャリア支援部門
2) 徳島大学理工学部理工学科情報光システムコース

1. はじめに

近年，社会に適応する人材教育の観点から高校・大学・社会の接続（高大社接続）を目的としたキャリア教育が展開されているが，キャリア教育が実施される段階で高校生や大学生が意識しているキャリア形成に関する課題が明確になっていないなど教育内容の一貫性が疑問視される。

本研究では，大学生に対して実施したキャリア教育上の課題に関する意識調査で得た記述式回答をテキストマイニングによって現状を分析することで高大社接続を踏まえたキャリア教育の課題を抽出するとともに，一貫性をもったキャリア教育の実現に対する解決策の検討を行った。

2. 分析データ

本研究では，本学の教養教育において開講されたキャリア教育（対象学部：理工学部，学年：2年次，科目名：キャリアプラン（2017年度），選必修区分：必修，履修者数：593人）を履修した学生を分析対象とした。

分析データの採取については，授業で使用するweb版キャリア学習ポートフォリオシステムを使用した。具体的なデータ採取のタイミングと質問内容は，全15回の講義のうち自己理解を深める前の5回目講義時に『これまでのキャリア形成で不足していたと思われること』を，自己理解を深め将来ビジョンをイメージできる段階の11回目講義時に『これからのキャリア形成で課題と思われるもの』という2つの質問に対する回答を250~300文字程度の記述式回答をテキストデータとして使用した。なお，採取データの回答者数（有効回答率）は5回目講義が529人(89.2%)，11回目講義が278人(46.9%)であった。

3. 分析方法

採取したテキストデータを用いて，テキストマ

イニング用フリーソフトウェアのKHcorder¹⁾を活用して分析を行った。具体的な分析の流れを以下に示す。

- (1) 形態素解析システムを用いてテキストデータから語（名詞，動詞，形容詞）を抽出する。
- (2) 抽出語のうちキャリア教育に関して意味があるものを対象にコーディングルールを適用することで頻出語をコード化した。ここに，コーディングルールとしては，社会人に適応することを目的としたキャリア教育が背景にあるので，日本経済団体連合会（以降，経団連と略す）の新卒採用に関するアンケート調査²⁾で使用された選考にあたって特に重視した点（以降，経団連指標と略す）をコードの見出しとして適用した。また，それに属さない頻出語については筆者らが独自に見出しを設定し，頻出語の分類・集計を行った。
- (3) コード化で得られた頻出語を取りまとめ，経団連指標との比較を行う。次に，クラスター分析によるテンドログラムと共起ネットワークを作成することで現状分析を模索した。

4. 分析結果および考察（経団連指標との比較）

分析結果として得られた抽出コードの頻度，クラスター分析，共起ネットワークについて，ここではキャリア教育に関する回答の頻出コード（経団連指標）において，「5回目講義時：自己理解を深める前」，「11回目講義時：自己理解を深めた後」，「企業が重視するもの」の3段階の結果を比較検討する。なお，クラスター分析や共起ネットワークにおいては，経団連指標以外の頻出コードになるが「自己理解」の抽出頻度や他のコードとの共起性が特に高く，キャリア教育において自己理解が重要なコードになった（これら分析結果の詳細はカンファレンス当日にポスターにて発表する）。

本研究で得られた頻出コードの抽出頻度と経

団連が実施した新卒採用に関するアンケート調査結果を比較した結果を図1に示す。この図より、「5回目講義時：自己理解を深める前」,「11回目講義時：自己理解を深めた後」,および「企業が重視するもの」の3段階の比較で興味深い差異が確認できた。特徴的な点について以下に列挙する。

(1) 自己理解を深める前後の差異

自己理解の前後で 10pt 以上の変化を示した指標は、上昇した指標が課題解決能力(+59.5pt),専門性 (+30.4pt),チャレンジ精神(+19.9pt)で、下降したものがコミュニケーション能力(-17.5pt)である。この結果から、自己理解を深めるまではコミュニケーション能力を活かして主体的に自己理解を深め将来ビジョンを描くことが求められたが、自己理解後は将来ビジョンを実現するための課題がイメージできたことで、課題解決力、専門性、チャレンジ精神が重視されている。この段階ではコミュニケーション能力も必要とされてはいるものの、他に重視する指標もキャリア形成の視野に入ることで低下したと考えられる。以上から、キャリア教育において自己理解はできるだけ早期に実施することが必要であると考えられる。

(2) 自己理解後と企業が重視する点の差異

学生と比較してコミュニケーション能力(+46.8pt),誠実性(+42.7pt),協調性(+33.7pt)など、企業がチームワークを重視していることに対して、学生はチームよりも個人的キャリア形成を重視する傾向にあると考えられる。以上から、学生には企業で重要視するチームワークを培う体験に対する意識が不足していることが考えられる。

5. 今後の展望と課題

今後、高大社接続を良好にするためのキャリア教育の観点から現状のキャリア教育における課題を解決案を含めて以下に述べる。

第一に、自己理解を深める時期が大学入学後になる傾向があるので、高校のできるだけ早期の段階で自己理解を深めることが重要であると考えられる。第二に、自己理解を深めた後のキャリア形成の意識が個人で完結させる傾向があり、企業が求めるチームワーク力に対する意識が低い。講義の中で実務レベルのチームワークを体験する

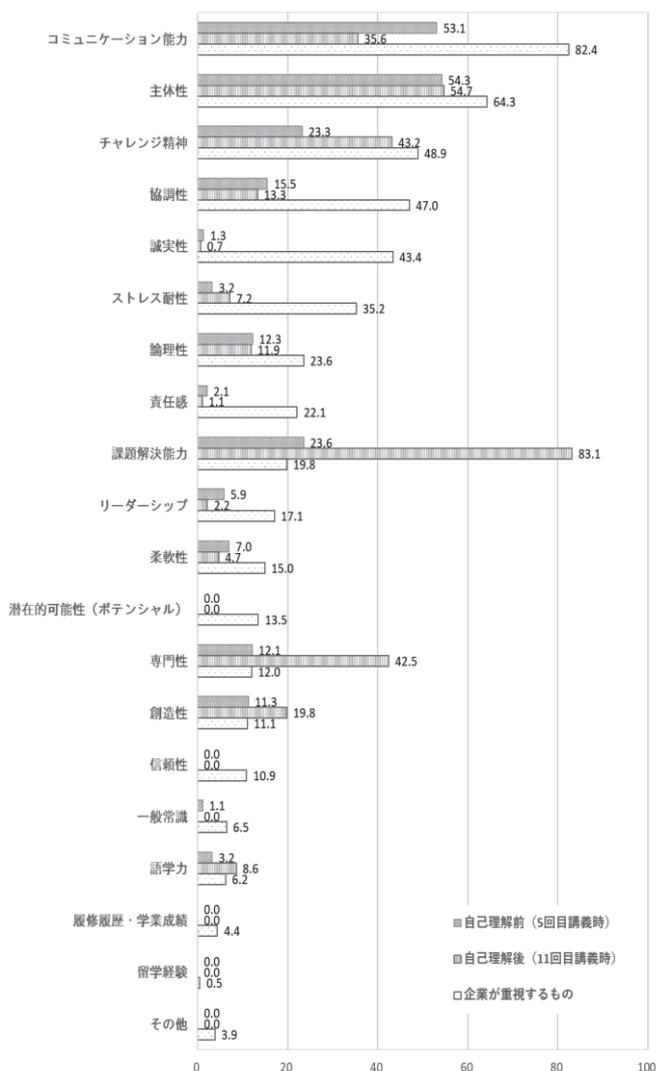


図1 学生と企業が重視する経団連指標の比較

ことは難しいので、インターンシップなどでチームワーク力の重要性を体験し、学生生活で醸成する教育が必要になると考えられる。さらに、実務レベルの就業体験により、企業と学生の立場から生じる課題の優先順位の差異をなくし、的を得た学生時代のキャリア形成を実現する必要がある。

このように、高大社で一貫したキャリア教育を体系化するためには、自己理解のタイミングや実務レベルの就業体験によるキャリア形成課題の最適化が必要であることが分かった。

参考文献

- 樋口耕一(2016)：社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—, ナカニシヤ出版, 2016
- 日本経済団体連合会：2018年度 新卒採用に関するアンケート調査結果, 2018

ポ
ス
タ
ー
発
表